



〔特集〕

親子を 育む家

家は家族の暮らしの基盤となるもの。

家族の絆をあたため、

共通の、あるいは一人ひとりの楽しみを広げ、

親も子もふれあいながら、ともに成長を重ねていく場になります。

家を建てる目的は、家族を育む暮らしを

家族でつくり上げることでもあるのです。

そこで、親子の暮らしを豊かに育んでいける家とは

どのようなものなのか考えてみます。

それはきっと、どのように暮らしたいかを考える

良いきっかけにもなると思うのです。

The
SWEDEN
HOUSE
THE PERFORMANCE FOR OUR PLANET

2017 SPRING
NO.
172

CONTENTS

2

〔Special〕

親子を育む家

GROW UP

&

COMMUNICATION

16

〔Technology〕

スウェディちゃんの
なぜ？なに？どうして？

教えてムース先生！

20

〔Culture〕

私の小宇宙Sweden

21

〔Essay〕

ウフフの我が家

22

〔Life Style〕

The moment of mjuk !

24

〔OWNER'S CIRCLE〕

Good Neighbors

26

〔SWEDEN HOUSE CIRCLE〕

Good Neighbors



家族とのふれあいが、 人格の基本をつくる。

大人になると、歳を重ねる度に一日が短くなるように感じます。子どもの頃はもっと長く思えたのにと。これは子どもが大人より何事も新鮮に感じられることに起因しているそうです。見るもの触れるもの、一つひとつが新しい刺激となって成長していくのです。そしてそうした経験が将来の人格や価値観につながっているといえます。子どもがいちばん最初に経験する対人関係は、家族の間柄ですから、家族間のコミュニケーションは人格形成に大きく影響します。家族が最も安心できると肌で感じとれ

る関係が重要になります。また、彼らの成長はあつという間。親にとっても子育てはかけがえのない期間。だからこそ、その大切な時を優しく包みこむ住まいの環境はとても大切なのです。「食事やお風呂、眠りの時間など、日常の暮らしの場面で、どういう風に子どもにに応じてあげられるかが重要です」と保育学・教育心理学が専門の秋田喜代美先生はおっしゃいます。「人格は他者（家族）との絆や安心を感じられるやり取りの中でつくられていくものなのです」。

分かちあって、 絆を育む。

安心感につながります。

「そうした関係に支えられて、人は持てる能力をこれまで以上に発揮できるのです。子育てでは、してはならないことや危険なことを教えることも必要です。でもその際には、子どもが自分で物事を考えられるという体験を持たせることが大切なのです。そして、大人がその様子を見守るゆとりを持たなければなりません。見て見ぬふりをできる心のゆとりがあれば、子どもの主体性を高め、自立にもつながっていきます」。

子どもは親の背中を見て育つといえます。親が楽しそうにしていると、子どもは、自分も真似したいと思うようになります。料理や買い物など、親と一緒に楽しみながらお手伝いするように、やがてその楽しさを親子で共にすることもあるでしょう。そうして、子どもは、その家の暮らしの文化を受け継ぎ、次代に向けてさらに、豊かな暮らしを育んでいくのではないのでしょうか。

親子を育む家 GROW UP & COMMUNICATION

心と体を 健やかに育む家。

住まいは、心と体を健やかに育む
場であり、家族の絆や安心を感じら
れる場であってほしいと、スウェー
デンハウスは考えます。

そのために空間構成のありかたは、
ひとつの大切な要素です。全体が大
きな箱のような一体感を持ち、どこ
にいても家族の気配を感じることが
できる家。各々のプライベートなス
ペースと、家族がふれあうリビング
やファミリールームがスムーズにつ
ながる家。そのような空間では、子
どもは家族を身近に感じ、自然に顔
をあわせることができます。また、
インテリアや家事動線、温熱環境も、
人の心に様々な影響を及ぼします。
好きなものに囲まれていること、快
適に家事がこなせること、一年を通
じて暑さ寒さに悩まされることなく

親子を育む家 GROW UP & COMMUNICATION



健康に過ごせること…これらは、そ
のまま大人が子どもを見守る、気持
ちのゆとりにつながるのではないで
しょうか。

スウェーデンハウスは、本物の木
の魅力を最大限に活かした住まいで
すが、これも重要な役割を担ってい
ます。視覚的な温かみに加え、たと
えば、年輪がつくり出す模様は、子
どもの想像力を無限に広がります。冬
でも裸足で過ごせる床の感触は、子
どもの脳の成長に心地よい刺激をも
たらすでしょう。さらに、フィトン
チッドと呼ばれる木の香りは森林浴
効果を伴い、私たちに癒しや安らぎ
を与えてくれるだけでなく、カビや
ダニを予防する働きも持っています。
また、木には優れた調湿機能もそな
わっているため、アトピーや喘息な
どのアレルギーの発生を抑制する効
果も認められています。

子どもが親や兄弟姉妹、祖父母と
のふれあいを重ね、家族の絆を学び、
豊かな感性を磨いていく舞台となる
住まい。永く安心して、愛情をもつ
て手を入れながら暮らし続けること
を通じて、家族の文化はもちろん、
ものを大切にする心も、親子・家族の
世代を越えて伝わっていきます。そ
してそれは、実際に暮らししていっ
しゃる多くのオーナー様がすでに実
感されていることでもあります。次
頁からご紹介する8つのご家族様の
ように、どうか皆様もご家族の絆を
育んでいく暮らしを、スウェーデン
ハウスで存分にお楽しみください。

秋田喜代美

東京大学大学院教育学研究科教授。同附属発達
保育実践政策学センター センター長。博士（教
育学）。専門は保育学、教育心理学、授業研究。
長年園内研修にかかわり、保育の質の向上や保
育者の専門性・実践知に関する研究を行っている。
日本保育学会会長（2009年5月～2016年5月）、
OECD・ECEC ネットワークビューローメンバー
（2012年～現在）。近著に『保育の温もり』（ひか
りのくに、2014年）、『あらゆる学問は保育につ
ながる』（分担執筆、東京大学出版会、2016年）。

親子を育む家

GROW UP & COMMUNICATION

「長男が生まれて、スウェーデンハウスに暮らすまでの約6年の間、少しでもいい環境を求めて引っ越しを4回繰り返しました。でも喘息の長男にとって、どこも環境が悪かったんです」とおっしゃる林さん。ご長男は4歳まで、年に2〜3回入院するような状態だったそうです。ご主人は、お子さんのためにも良い住環境を求めて、家探しに本腰を入れたとおっしゃいます。「戸建でもマンションも、新築も中古も、住宅展示場もまわったし、不動産屋さんもまわりました。でもどれもピンとこない。そんな時に出会ったのが、この土地とスウェーデンハウスでした」と奥様。まさにぴったりの環境で、しかもスウェーデンハウスが建ち並ぶ街なみたったのです。「いま考えると家探しを通じて、自分たちが求めているライフスタイルやどんな家庭をつくってい

きたいかがわかってきたように思えます」とご主人。「スウェーデンハウスの街なみなので、窓からの眺めも素敵です。皆さん、それぞれに雰囲気があります。お庭づくりもいろいろ教えてもらっています。子どもたちが外と一緒に遊ぶ時も、年上の子が小さい子の面倒をみてくれたり、上手に遊んでいます。奥さんたちも子どもを注意するポイントがどこか似ているような…。家が同じだと価値観も近づくのかな、なんて（笑）」と奥様。ご長男の喘息もおさまり、取材中もご長女と元気に遊びまわっていました。子どもの頃からバイオリンを続けられていたご主人は、地元のオーケストラに参加されるようになりました。ご長男はピアノを弾かれ、奥様はフルートを習いはじめたとか。音楽という共通の趣味で、ご家族の健やかな毎日を奏でていらっしゃるようです。

Owner's
Comments

02

「健やかな住環境を求めて」 家づくりは、ライフスタイルづくりでもある。



三重県 川井さん
2011年11月入居
ご夫婦と二人のお子さん、
ご主人のご両親の6人ご
家族。家族が自然に集まり、
賑やかに暮らされる
3世代住宅です。



Owner's
Comments

01

「気持ちのゆとり」 ゆとりと安心を生む二世帯住宅の形。

下のお子さんを妊娠中に、散歩がてら出かけた展示場でスウェーデンハウスに一目ぼれされた川井さん。家づくりはまだ先の話と考えていらつしやいましたが、ご両親が長年営まれたお店を閉められたことと、ご主人の職場が実家の近くに変わられたことを機に、「二世帯住宅に建替えようか」という話もちあがり、妻がすんなり同居しようと言ってくれたんです」とご主人。奥様は話されます。「大好きなスウェーデンハウスを建てたいという気持ちと、正直なところ、子どもたちが手のかかる時期に、お母さんやお父さんに助けてもらえたら…という思いがありました。その頃、主人の仕事が忙しくて、気持ちに余裕が持てずに子どもをしかることもありましたので」。

いつでも、うちは食事もみんな一緒、お風呂もひとつ。みんなで暮らすと楽しいですよ。話題もいっぱいです」と奥様。ご主人は「回遊できるオープンな間取りですが、家中が暖かい。だから子どもたちはぐるぐる走り回ってどこでも遊び場になっています。この空間と子どもたちが、二世帯をつなぐすがいいなっていますね」とおっしゃいます。奥様は「お父さんやお母さんが子どもたちを見ってくれるので、時間にも、気持ちにもゆとりができました。子どもたちにも、おじいちゃんやおばあちゃんは大変な存在です。遊んでもらったり、私にしかれた時には逃げ場にもなってもらっています」と笑顔で話されました。川井さんのお宅では、明るく賑やかに、ご家族が助け合いながら子育てをされ、3世代の絆を紡いでいらつしやいます。

東京都 林さん
2012年3月入居
4人ご家族の林さん。ご長男の喘息もおさまり、スウェーデンハウスの街なみで、ご近所の皆さまと子育てを楽しまれています。



親子を育む家

GROW UP & COMMUNICATION

新居に求められたのは、まず暖かさ。そしてご主人の趣味であるドラムを叩ける防音性能でした。「木造でスタジオなんて考えられなかった」とご主人。最初は鉄筋コンクリートの家しか頭になかったというお二人は、スウェーデンハウスと出会い、カルチャーショックを受けたとおっしゃいます。「室内にふんだんに使われていたパ

自然に恵まれた土地での移住生活を、借家暮らしからはじめられた今野さん。「娘が幼稚園に通いだして、約2年の間暮らしたその借家が酷かった」とご主人はおっしゃいます。「結露がすごくて、床が水びたしになるほどでした。ほとんど陽が入らなくて、本当に寒かったですね。家の中でダウンを着て、寝る時はニット帽までかぶって…罰ゲームかと(笑)。ある夜、寝ていた娘が起きてきて、お父さん、寒いよ。って涙を流した時は、なんとかしないといけないと思いました」。

Owner's Comments 04

「帰りたい家」
本当の愛着は、
つくり上げるもの。

Owner's Comments 03

「楽しみのかけ算」
安心な家で、
広がる家族の暮らし。

近所で泥棒騒ぎが起こったことをきっかけに、居倉さんは防犯の観点から家づくりを考えはじめられました。そして、スウェーデンハウスの木製サッシ3層ガラス窓が防犯にも強いことを知り、家そのものを変えないと安心な防犯性能は得られないと考えられ、築25年程の家の建替えを決意されたそうです。その他にも暖い家にしたいというご希望も持ちでした。「子どもたちがどこにいても、ちゃんと見守れるように間取りの工夫もしました」とご主人。キッチンを家の中心にすることで、そこから、1階は子どもたちの居る場所をほぼ見渡すことができます。さらに、吹き抜けと階段を通じて、2階のファミリールームとの一体感も。広いファミリールームには、たくさんの本が並ぶ書棚や飛び箱も置かれています。「できるだけ自由な空間にして、好奇心を刺激してくれそうな



「お母さんもお父さんも料理が得意なんです」とおっしゃるお嬢さんに将来の夢をうかがうと「いつか私がお母さんになってこの家に帰ってきたら、赤ちゃんにこの家暖かいでしょうって言ってあげたい。お母さんとお父さんのお料理、美味しいでしょうって言ってあげたいな」と話されました。

イン材が濃いアメ色になっていて、香りも気持ちよかったですし、暖くて心地いい。気持ちすべて持っていけましたね」。お嬢さんが7歳の時に新居に移られ、これまで大切にご家族の時間を積み重ねてこられました。ご主人はおっしゃいます。「これから挑戦したいのは、ガレージやビザ窯づくり。家の躯体はしっかりつくってもらって、後は自分で時間をかけて仕上げていきたいんです。最初から完成品を手に入れるのではなく、少しずつ手を加えることで、初めて自分のものになっていくと思うので」。

神奈川県 今野さん
2007年3月入居
アウトドアが大好きで、時には鹿や猿と出会うこともある自然豊かな土地に、「移住」された3人ご家族です。

「妻は日常を楽しみに変えてしまいう天才なんです。妻と子どもたちのおかげで、自分も家族と一緒に暮らしの二つひとつを楽しむようになったと思います。趣味の日曜大工もわくわくしながらつくったものは、家族もわくわくしています。親が楽しんでいることは、子どもたちにも伝わると感じます」とご主人は嬉しそうに話されました。

福岡県 居倉さん
2009年1月入居
建替えを機に奥様の夢だった「文具店」のスペースを併設されました。3人のお子さんに囲まれて、賑やかな毎日を楽しまれています。



千葉県 日野さん
2008年12月入居
緑に恵まれた公園を身近に、スウェーデンハウスがゆったり建ち並ぶ街なみ。愛猫とご家族4人で、日々の暮らしを楽しんでいます。



「それぞれの場所、つながる場所」 響きあう楽しさを支える居心地。

日野さんの奥様は、趣味の空間のある家を持つことが、子どもの頃からの夢だったそうです。「実は建築デザイナーと家をつくりたいというイメージを持っていた。でもある日、私が温めていた夢を話していたら営業さんが「スウェーデンハウスは基本性能が優れているから、何で

もできる家なんですよって。その一言から、どんなこだわりも家自体の居心地のよさがあって初めて楽しめると思うようになりました。思い通りの間取りやインテリアを実現しても、もし暑過ぎたり寒過ぎたりして使えない空間があったり、窓が結露するような家だったら絶対に後

悔します。基本性能が高くて長持ちする家で、夢をかなえようと思いましたが」と奥様は話されます。「洋服や小物づくりのスペースを作りたい、でも家事も手抜きをしたくない」。そんな奥様の希望から、専用のワークスペースを家の中心に配置されました。一方、ご主人も長年の夢だったスピーカーづくりをはじめられました。「スウェーデンハウスは音の環境もいいですよ、自然な臨場感がある」とおっしゃいます。お子さんたちにはそれぞれの個室をつくり、共用部分は家族全員が集まり

やすいようオープンに。どこにいてもご家族の気配を感じられ、それぞれにやりたいことができる場所がありながら、全員がつながることができる設計です。ご主人はおっしゃいます。「この家を建てて、お互いに好きなことをはじめることができました。好きだから長く続けられます。でも続けていけるのは、この家の居心地のよさあってこそなんですね。この家は建てて終わりじゃない、この家をベースに、楽しい暮らしをつくっていきたいです」。

「幸せな時間」

住まいの性能が育む家族のふれあい。

中村さんご夫婦が初めてスウェーデンハウスに出会ったのは、先輩のお宅でした。「その当時、家を作る気はまったくなかったのですが、一戸建ては寒いというイメージが一変しました」と奥様。ご主人も「先輩の家がとにかく暖かくて、猫も居心地よさそうでした。パ

イン材の雰囲気も外観も気に入ってしまいました」。お住まいになっていた住宅は立地がよかったそうですが、結露と湿気がすごかったそうです。そして、家を建てるならご長女が小学校に入る前に…とのお考えもあり、家づくりがはじまりました。ご入居後、1ヶ月程

でご長男が誕生し、「生まれたのは寒くなる時期でしたが、いつでも家中が暖かいから、夜中の授乳もお風呂上がりも心配することがなかった」と奥様はおっしゃいます。共働きで家にいる時間が限られるお二人。効率の良い家事動線や優れた住

宅性能が、ご家族がふれあう幸せを応援しているようです。ここに暮らされてから「家族の時間が増えた」とご主人。「家で子どもたちと遊ぶことが多くなりましたね。自宅の頃は騒ぐとご近所迷惑にならないか心配で、週末は出かけるようにしていました。今は気にせず、子どもたちは思いきり飛んだり跳ねたりしています。そんな家族を眺めながら家でごろごろしているのが幸せなんです」と話されました。



千葉県 中村さん
2011年9月入居
奥様のご実家の隣地を購入し、新居を建てられました。共働きされながら、お子さんたちの生活のリズムに合わせた毎日を楽しんでいます。



「若くしてかなえる」 家族を見つめ、将来を見据える。

20代で家建てた寺杣さん。「いつか自分の家を持つと思っていても、思い立った時に動かなければ、その時はなかなか来ないと思うんです。住んでいたマンションは子どもが大きくなったら手狭で、いずれ出なければならぬことはわかっていました。それなら、このまま家賃を払い続けるより、自分たちの家に費やしたくて」。お二人は最初、駅前のマンションを検討されました。しかし、駐車場から家の玄関までの遠さがネックに。「子どもが小さいと荷物も多くなるので、いったい何往復しなくちゃいけないの?」と思いました。「戸建てならその心配はありません」と奥様。ご主人は「家族のスタイルは、家族の数だけあります。自分たちの生活を家に合わせるのではなく、求める生活に家を合わせる」が「戸建ての醍醐味です」と話されます。家はそこに住むご家族の価値観や感性を形づく

る土台になるもの。お子さんが成長する場所であり、見守るご家族の幸せが築かれていく場所です。奥様はおっしゃいます。「子どもには、いいものを知ってほしい。この家で育ったらわかると思うんです。マンションで過ごした夏はとにかく暑かったし、冬は玄関ドアまで結露していました。でもこの家ではまったくありません。眺めを優先して北側をリビングにしたのに、こんなに快適なんです。本当に快適な空間で過ごすことがどれだけ幸せか。それはきっと子どもの感性にも響くはず。子どもがまだ小さい頃にこそ、スウェーデンハウスで育てたいと思ったんです」。

ご主人はおっしゃいます。「将来は、バーベキューができるウッドデッキをつくりたいですね。そんなふうに少しずつ変化させていく楽しみがある家はいいですね。それがいい目標になるし、毎日楽しくする活力になる」。



茨城県 柏木さん
2008年 那珂キッズクリニック小児科
2011年 ARINKOMURA(ありんこむら)
クリニックの院長、保育園の園長として、
医療と保育を連携させた新たなサービス
を提供し地域に大きく貢献されています。

「親目線で、小児科医の目線で」 子どもたちのために、本当にやさしい空間を求めて。

柏木さんは小児科医院のなかった那珂市に「那珂キッズクリニック小児科」と病児の保育施設(しろやぎさんのポシェット)併設の認可外保育園「ARINKOMURA(ありんこむら)」をスウェーデンハウスで建てられました。先生はおっしゃいます。「スウェーデンハウスは子ども向けの医院建設に最適だと思います。ひとつはスウェーデンハウスのような木の家では、お子さんが院内で怪我をしても大きなダメージを受けないということがあります。自然の木なら、お子さんは適度なゴツンを体験できる。この加減が大切なんです。もうひとつは、高気密性能です。感染症の患者さんが多いので、院内感染の防止は徹底したい。この家は高気密だから、空氣の流れを的確に設計でき、院内感染のリスクを大きく減らすことが可能です。そして、居心地のよさ。人生のほとんどを院内で過ごす小児科医と一緒に働くスタッフにとって住環境は大事なんです。

私たちが満足する住環境は、来院される方にも必ずプラスになる。実際にお母さんたちやお子さんに好評なんです」。

隣地に佇むARINKOMURAは、園児にとって一日の大半を過ごす場所。それならスウェーデンハウスという本物の環境にしたいというお考えから建てられたと奥様は話されます。「L字の建物に三角屋根、煙突もついたまるで絵本にでてくるような外観にしました。私が好きで可愛いと思うカーテンや壁紙を選び、小物や本などは、息子や娘と相談しながら決めました。サンタさんが来てくれるように薪ストーブも。親として、小児科医として、看護師として、そして子どもの目線で、あったらいいなを形にしよう。子どもたちは大人になったら、ひとつのことは覚えていないかもしれない。でも本物の木のぬくもりに包まれて育ったことは、きっと感覚のどこに残っていると思うんです」。



東京都 寺杣さん
2011年2月入居
このまま家賃を払い続けるなら自分たちの将来のために費やしたい」という堅実さと家族で過ごす時間をいばんに考えられ、20代で家を建てられました。